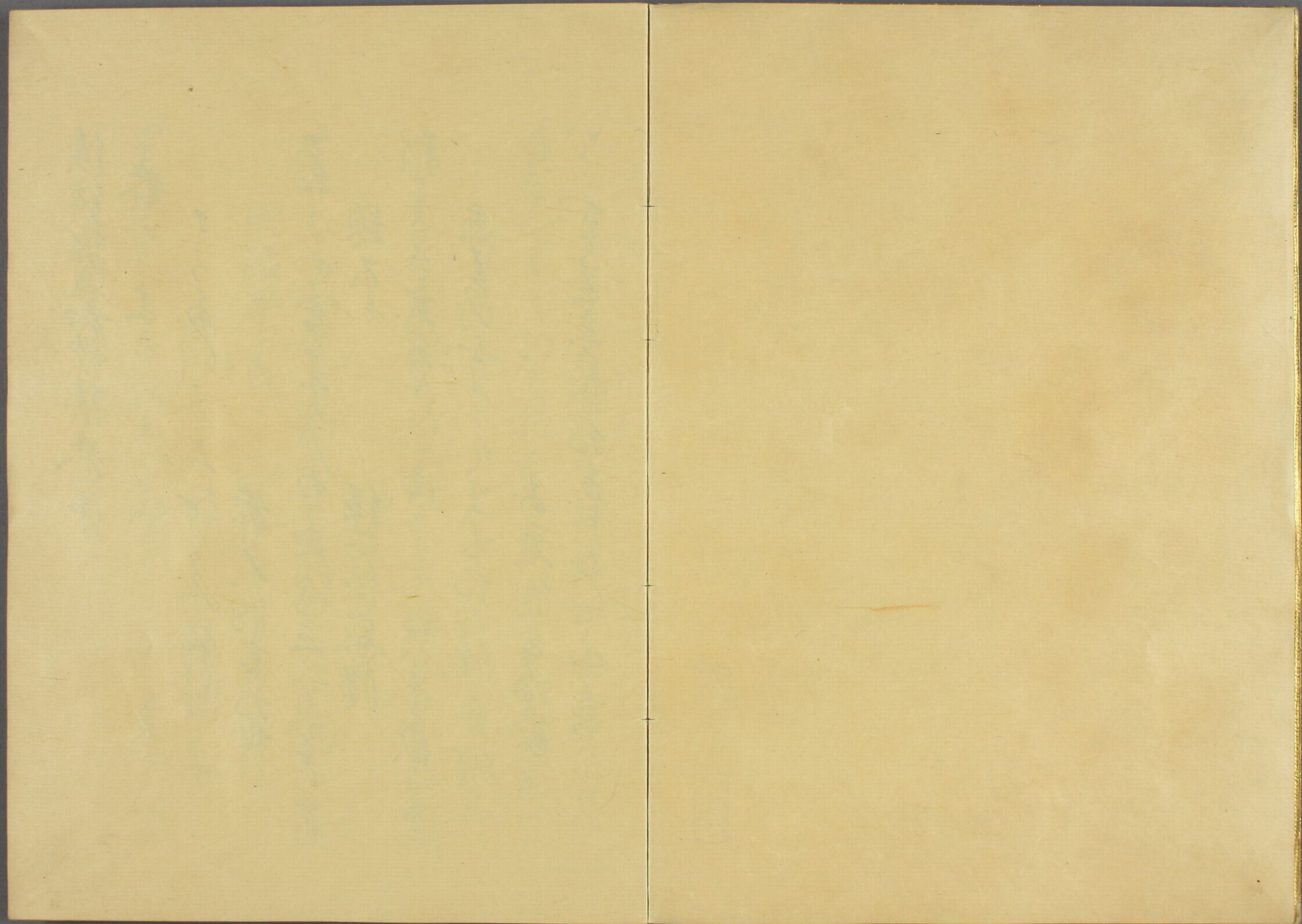




續後拾遺和歌集上



石渠寶笈



續後拾遺和歌集卷第一

春奇上

さうあつこころとよみゆけり

前大納言為母

とわらやまの春あはれわづれはささけり

題不知

後二位家澄

朝もくさあはれふひゆきりけり

立まの奇とそよこゆけり

前大納言為家

いとやとまさくしおあはれひくは

まはれあはれ 源信明和氏

春もくさあはれふひゆきりけり

題不知

大中臣能宣朝臣

春もくさあはれふひゆきりけり

柳中入丸

春もくさあはれふひゆきりけり

開路早まといつこころとよみゆけり

后守多院御家

春もくさあはれふひゆきりけり

去来宮遅と云

よき人志し

美家あまひくそと極めつるをそとに言ふは  
志しらす 中務卿具平親王

言はるゝとまうと整ふは出く家もなふまを  
朝駕とつらふとまをせ給ひ

河原

知目をくろくそとまをせ給ふは出く家もなふまを  
言言と 後二條院河原

ふふき言の言出ふたり教の人よまをせ給ふ  
志しらす よき人不知

福よめそ人よきけり言はあまひくそとまをせ給ふ  
河原殿子女王言あまひくそとまをせ給ふ

壬生忠見

我宿の梢とまをせ給ひけり言はあまひくそとまをせ給ふ  
地長山河の屏風は紀貫之

言はあまひくそとまをせ給ひけり言はあまひくそとまをせ給ふ  
志しらす よき人志し

しとまひと逢ひぬけり言はあまひくそとまをせ給ふ  
承元二年後宇多院は百を言はあまひくそとまをせ給ふ  
とまをせ給ふ 河原

吹まふ破山あしきまらえそ仲志が河ひは漢宮を  
おのゝんそ 前大納言お母

まふそとまふそりえお母を弟はは枯葉よまふ漢  
後九条内大臣家よ五十五十一そまふそと約ける  
河武藏守 後二位家澄

春とまふそとまふそ武藏守やあまの言れ下弟  
建保二の内大臣家百そまふそ朝若菜  
お中納言定家

あつるまふそ約新のまふそは袖ありてあま福  
部一らふす まふそ人一らふ

弟登山家立おまふそまふそやおの弟のあまつひん  
小野 文右大臣

まふそは龍とまふそて登るまふそあつとまふそお母は目ま  
春れまふそ中大臣 惠慶法師

東海まふそやまふそあまあまあまはまふそあまあつひん  
内大臣まふそ約ける河家まふそ百そまふそまふそ約ける  
小朝まふそあま 光の君も入道お持政家

若そまふそあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
僧正遍昭まふそあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
まふそ人一らふ

天つたぬ夜のこととねじに時津よ出くつたわ

二首平首方れ中に

曾祢好忠

祢幸りつむきの山田にありあらそ秘伝そのおまけ

衆を 中務の宗并親王

山平の衣やしきまの目光よすむあまはる

相方取そ松何よ九千笑あまよせり所

乃屏風り 大藏の有家

まはりあまの心あやまうく嘆きそかまじり

又保三〇垣宇あ陸よ百そ方なけり所

関白の政大臣 冬平云

あつたはまの梢もすしむめりつとむるの雲は

正治二年は鳥羽院よ百そ方なけり所

皇太后の文平後成

衆あつりの山と川海をいまの都りのよそまけり

まはり方の中に 前大御公の成

春夜もあらふりあつたのうらみ言しるは

たふのよゆきり時伊勢勅使よそりゆき

ふきとけとととを 後京極持政前大御公

お飯のいえそそ御進の衆よけく志賀の

初元と辛戌字由陀は百三才なるもの  
時辰 入道前を政之臣

あまのあき雄よりうまを海の浦に家立りあられ  
文保三の百三才なるものよりあき時

権中納言云雄

あまの浦に雄乃一とらにあつともみえのすし  
り前よりみゆりの中

津守四助

伊をれあまの家のま神波をそまは家とさなるに  
わさあまを杖何よ九十候あまのせりつ時

乃屏風よ

は鳥羽院文因

あまのこやとをけらあまのあまのあまのあまの  
まのゆえの中は 後鳥羽院御家

あまのあまの家もあまのあまのあまのあまの  
文保百三才なるものより

前大納言云世

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
前大僧正道玄日吉社とてあまのあまのあまの  
あまのあまの中は 源惠氏朝臣

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの



舞景殿也所乃方合れし

平兼盛

山川のみと海とより春風よ昔のそりかきい道

去方中に

故光のそりかき持たた

難波江や葦のの葉と吹風よそりかきい道

柳よよませ結び

後鳥羽院御歌

く衣立田川原の河風よ波りて結ぶ春柳のいと

家よ十首よりよのゆきろふ柳歌

山階入道たたら

いふ娘のてそめ葉とよのゆきろふ玉わく春柳

新殿子女王御歌今合柳と

壬生忠見

春柳の糸の乱て春よの露乃玉わくをわたりん

春元と年百をよのゆきろふ玉わく

二品法親王實助 後醍醐皇子

春柳のみより糸の乱てこのをわく春や花

野一らす

前大納言為家

春の日は光とあじ玉ろくひてわとて春柳のいと

性助法親王御歌よ五十年よりよのゆきろふ

後西園寺入道おとめ

風吹柳の系玉のゆきもあはれきり  
妹子内親王家のうき合は梅始用と云ふ  
ゆきもあはれきり

和歌の風の匂いよおとろけの秋は  
梅の世は  
建仁元年のほろ御院は五十首うたへり

前中納言定家

白糸袖もそとふあつじみさう  
赤の梅乃初花  
むしーらす  
頂法院御歌

あはれふおとろけの梅は  
多とあはれや  
常のうき  
さしきさおとろ梅の  
ゆきもあはれきり

正原梅梁

あはれふおとろけの梅は  
多とあはれや  
常のうき  
むしーらす  
中納言家持

梅乃をあはれ日より  
あはれきり  
の梅は我は  
あはれきり  
云  
御門院御歌

あはれふおとろけの梅は  
多とあはれや  
常のうき  
むしーらす  
百首うたへり  
御歌

あはれふおとろけの梅は  
多とあはれや  
常のうき  
むしーらす  
長久二年の弘嚴殿  
御歌

長久二年の弘嚴殿御歌

伊勢大輔

形を色なくく切らぬ金の雲をいろくふかりそをてら  
弘長元年の頃焼滅院より百そふをけりつ時  
おのゝらふと 常盤井合前を改む

天のうきおれぬの切らぬとてわうらぬをけり  
表す中に 前中細云定家

里おのゝらふとてな立別あはしとてぬまぢり  
うらぬのこも十首をけりし時ゆきと

山が娘の衣より金きぬふうみとてやまゆらん  
右衛門将為定

堀河院より百そふをけりし時早蕨  
大細云云矣

千の燈の糸糸いやくとみえなくに下りえ流るまぢり  
和方取くと松何より九十がえあまをせける時蕨

乃屏風よ 前大僧正慈鎮

雪消てしとあめとてふる風ふしのこむ燈入る花の煙東  
都くらす 友尔澄信約片

く一響はういの山とあさゆきとてひるあふさくは  
燈をぬくとある 藤原澄祐朝臣

流のふおのゝ燈の糸糸候みりてふすそをまぢり  
あ

春雨

清原深雪文

春風やあつてさむらん筆をさしの緑をささふ  
部一す 前大納言為氏

春ふぬとあふふひつゝさかすまの山もやけ  
百そふのよませ給けつ小橋

二条院御歌

よふとみまのけしきあまの山はささる  
為山歌とふふ

有原基俊

新田のまゝにすむふら書おとろく我いふり

新方とてある 贈後之位為子

山橋まのふれりしはあまの山はささる  
建保四年後鳥羽院より十そ方

りふ山歌 春後雅經

わきまのふれりしはあまの山はささる  
初見花とつらふとよませ給けり

依見院御歌

嗚そひらとふらぬれらみえそ由をよふ  
部一す 有原為道御歌

橋もあまのふれりしはあまの山はささる

後京極格及前京極格

様む今う所はし喜柳のつゝこよ雲そくわ

前中細云匡房

白雲のあそわつゝのつゝこよ雲そくわ

花満山河とふとふと

先の寄る入道お格及前

吾聖川若り様嘆ふより翠より所く致の白雲

新しらす

法不定為

善風よ伊勢の心れ暑晴てつそぬ雲も様ありん

家よ花也十首よりよ約げの中へ

後京極格及前京極格

吾河とわつゝのつゝこよ雲そくわ

けつら那

續後拾遺和歌集卷第二

表前下

女首乃方よりせ給けり

後宇多院御歌

白雲乃昔まゝのてみえつるより山は横ぬり  
元亨二年飛山殿そとてむとさり  
て女首乃方つりし時歌

前大納言為世

乃らまゝいあらてくさぬはくはの横ぬり白雲

歌一しす

院御歌

知か〜と云乃雲そ白ふらる横ぬり時

百三乃方時 前大納言實教

多ら海ふをいひし山横ぬりぬえ海ふり時

和方取を松何よ九十賀ぬまをせけり時

の屏風よ

泰後雅理

乃首乃雲いぬらまの山横ぬりぬえ海ふり時

弘長元年の百三乃方時歌

前大納言為世

歌の多しはしわす山横ぬりぬえ海ふり時  
雲乃多しはしわす山横ぬりぬえ海ふり時

遠山橋とよきと 源俊賴の長

岩淵ぬふれ煙とみえつる霧よ白くはくらはなりき  
文保百とてうめてはうけりけり

前ちかたの長

心もみえとひらふらうふもやものひらなるん

津守國冬

君の言と雲なれとておちるやうはくおん  
都みやこ一とす 後惠法師

心もみえの橋とみえそちのむらうらけり

三条入道たの長

君の入吉野のむら橋を白くしふくたのまきり

河原とてうせけり

河原

弟野のむらむの白くそけみうはは風を吹

よふ百とてうめてはうけりけり

前中納言定家

川流や志願のむらの子む日おるぬまの浦風を

元喜う心はうはせりよめさくははは  
三首う合ふ浦を流は平昔舞

心もみえのむらと白くそけりけり

前入納言定房

おまの神もやせきくはるはれはるのまの風  
部 一 らす 後二位家澄

海士山舟もをひひくおきくくはれはるの風  
津守四助

飛鳥風のまはるをやれはるはれはるは  
花時心不静とらふとと

和泉式部

のしるおりのまをれはるはるはるはるは  
永義五年祐子内親王家乃方合は

右京左衛門尉

長深もこの橋乃白の宿の守文や風とら  
位下はるしりくけり阿都とさうりて釣方と  
あせしれはるはるはるはるはるはるは  
せけり 飛山院津家

我宿の雲のれ橋のまはるはるはるはるは  
起ふ知 中務の具平親王

咲てらるとはらりせはれ橋はるはるはるは  
権中納言宗母

雲ののみくもやまはれはるはるはるはるは



羈中歌と

後西園寺入道おたむ

風ふり雲の宿とふゆふふゆふふゆふふゆふふゆふふゆふ

都一らす

伴勢

みますおほほおとこふふふふふふふふふふふふふふふ

鳥羽院白河よ水音ありて歌はらへ

日よゆけ

前泰後教長

なつふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

歌乃方中

西行法師

吾輩の楳のむとみ日らふふふふふふふふふふふふ

世はよゆりてよみゆけ

よみゆけ

あすともきふふふふて山橋をららるる人よつ

都一らす

源道深

木のりふふふふふ山橋のらふふふふふふふふふふ

元亨うらひ七月飛山殿とてふとて

つとて七首さうつとてつとてつとてつとて

有原為明朝臣

ゆふのらふふふふのらなふてとてはよ

花下ふふふふと源為氏朝臣

日殺らふらふふふふ山橋らふと根と接ねせ

孝子院の方合号 大中后杉基御札

あのめいふおきてうまの様に花まきと花とふあそびは  
依母院位よなましりくけり阿む五十そ前

なまけつふ 前大細玄俊光

あはせる根の雲を晴ふらうよのまれせふ花やう

花方れ中に 津守國道

見らまの梢の雲いふ晴てらりいふらうとふ

む十そ方鏡のたに 贈たふに 長實

きふらりのましとふらん山様らふふれはらるる

題不記 典侍親子御札

らりゆいふうくやゆはほしそふ嵐のふと世せ

香光院入道前実白の御札

吹風らふふらまふら花よつとふらうら山は

久世との崇法院よ百そ方なまをり

大炊御門右大臣

花のらふひよらのとふとあやふまははら

花方れ中に 宗超法師

年をくつとふら物に梅花らふふあそび

天法四年内裏方合号

慈威

我者よ常しく鳴あふ庭をうらむに花やらん  
亭子院の方合に 凡河内祈恒

めふみえそ風あふこも青柳のあひくくもそは  
町一らす 順徳院沖繁

おもふふりの梅とこ春をそくおさそ苗の流の泉  
花苑とよあう 前入御云仲純

とほあふあふもみえに昔登川いほほしものもそは  
お僧正道性 飛山子

志候のおまれ神とみまいふ風よあてゆねの古流  
も前百とあふもそまうりけり

梅苑をとりあふむそらまそはれおん老の心ほえ  
鳥苑もとあふもそ 為道朝臣

鳥よあそいさうんはほそとあそみよれ苑  
晴のあつとあふ大老のむと見ゆらと

このてほあといせくもあひら  
前入僧正道昭

鳥よあそ登乃れれとさうみ母のむと行やの  
町一らす お中御云資実

代よて雲おのむとあしとあそ光本れと  
前入僧正道助

前入僧正道助

あすそとやそらにぬぬり来とらのもつとむは契凡

二条院續後

嘆そめて我世よち〜ぬむ〜い何み〜のれふまは

有原京總

老世れ首ふ〜るま〜今一〜り我いんそ何

深慈氏約下

我〜りい〜る〜い〜ぬ〜身〜と〜ま〜い〜老本れいふま風

久保田〜方〜を〜け〜所〜開白〜を〜改〜入〜臣

今〜身〜れ〜ま〜の〜め〜く〜〜と〜ぬ〜そ〜て〜み〜り〜ぬ〜宿〜れ〜改〜め〜る

去〜方〜れ〜中〜に 二品は親王是也

予〜む〜初〜の〜月〜を〜て〜ま〜よ〜思〜つ〜る〜と〜思〜つ〜ら〜れ〜ま〜の〜じ〜う

後宇多院は月廿十<sup>十あす</sup>〜方〜を〜り〜け〜る

前大納言為母

老〜身〜れ〜ま〜や〜昔〜の〜女〜と〜い〜ふ〜予〜も〜い〜ふ〜そ〜と〜い〜ふ〜月

飛心殿乃七首首方は苗代

後宇多院御製

と〜れ〜ら〜苗代はれはま〜く〜ふ〜と〜ら〜わ〜つ〜の〜ん〜あ〜ん

民部〜て〜為〜有〜茲〜人〜也〜の〜そ〜と〜し〜を〜り〜時〜の

己〜れ〜の〜あ〜と〜中〜つ〜ま〜を〜得〜々〜ふ〜は〜く〜い〜は〜く〜得

々〜れ〜中〜つ〜ら〜け〜る 権入僧部云順

引末と様ういひし言目山鳴けり有乃也とみり  
也一 氏部二有者

ゆ末と様色そと言目山ふひよとみり  
蒼色をよめる 前大納言基良

りくひいりる世ふあひ弟うきても志くぬす  
惟宗忠秀

各と神もみりしゆあひ弟ひてうらうらう  
山家郭云と 菅原左良将下

部今より人抱と心置いさうとつりく  
元亨四年故宇多院十と方なるけり

阿山郭云

権中納言云明

位山のりてさけく之堅れかたしうらふ  
和方取をそ粘何よ九十歳あませけり  
乃屏風よ 宣秋の院丹後

阿山郭云とあり 小弁  
思ひねをよし物と阿山郭云の思ひくえ

平義政

郭云そのさ月ととせも思ひはよあひ  
五月あゆ 笑後基久

五月五日の格もあこえきこらゆえに

よし介しらす

きふく日教しやぬほのまはあつ格はあ

日教つちり川の五月あよ信とくあまは

邦首親王家み千そふれあ心と

鴨祐夏

五月あつたふららの此聖田乃玉川後

はくしよりまとしてきこ人の都わくくゆふ

みか月つらにあつたふらつてせゆくに

つよそゆたれいよし介しらす

ひふせんよ鳴つてき人阿も君らふと

なふれ中に 照念院入道前実白を

いそらあつらつてきるあな短衣の先乃

述懐百首中方中にわ

皇太后后を

ふりして消ぬあつたのゆあも母あつ

都しらす 有原頼氏

神よききあつてきりあ弟あの上も

光的筆も入道あ括及あ三十首り

康壁門院少将

をうらまへぬ海の神よに秋とく露や玉かふるん  
かえり百々うらまへてうらりける時秋なり

は下定為

ふわいよみぞ持ほぬふもてうらりける時秋なり

題ふ知

よき人しらぬ

秋さへおむらよふそく露乃けぬく我が心あふ

又永八年七月七日白河殿そくしるし

うらりてうらりけるまつりけるついで

後醍醐院御製

雲深の神もたやうはほ古枝よらもる露乃

皇太后上皇后

雲さうさ雲に横乃むやうは嵐そくうらりける時

かえり百々うらまへてうらりける時花

贈後二位為子

らうら物ももみえに横乃嵐は雨ふゆのそ

刀ふらふ小笠のらりつりのそくうらりける時

約けり

枇杷たふは

らうら物ももみえに横乃嵐は雨ふゆのそ

落葉乃心

友原為親朝臣

君との心そらりふ白雲は雨はし程やうらりける時

大宰大貳重家

権左兼のあつきよは風をけいむらぶれとて若くあり  
少首方よりませ給けりふ

後守西院河家

らら又若く消れて権左兼成せのつとそそ人  
刃をれ交とせり河野の方とてよませ給  
けり

体見院河家

あつきのあつひよしとて若くあまのいひ給  
むふ知

西交たふれ

まららぬもとまきり善風ふれもやうん故と  
り

権左徳和の体見家とて人々方々  
々々河野家とて権中細云通後

あつきのあつひよしとて若くあまのいひ給  
むふ知

権左徳和の体見家とて人々方々  
々々河野家とて権中細云通後

後守西院河家

らら又若く消れて権左兼成せのつとそそ人  
刃をれ交とせり河野の方とてよませ給  
けり

前中細云定家

あつきのあつひよしとて若くあまのいひ給  
むふ知



元亨二年八月十九日新垣守重院は月卒を

方卒の時月 二日法親王賞賜

身ぶらわめりし勢のありて光るる月と云

去勢の中の 徳宣朝臣

むらぎらるるもんけいりし月と云

石心はあつて晴るる月と云

前大納言云

なよい月ありせむおけい去りし月と云

元亨三年八月十五日夜月廿十そりなむ

時去月 権中納言云雄

出それんけいしよゆえそとゆら新すむしと云

去月と 平宣時朝臣

春の秋と云むおいしと云すつらぬる月の勢

祿子内親王家方合よ新浦月と云

中務

新と云くせもも去りの月と云人かたなりけり

寛治二年百そりめされけりつらぬる月

月 後醍醐院御名

いかに新わりのと新す月と云あつたりのと云

浦去月と云

後二条院御歌

薰火くくちよる浦の雲月燈りりともかよひし御  
歌一らす 　よもいふか

とくともらうい燈るすあふとせしむとて御  
前中細云定家

雲あふのた坪とみまつとゆん袖いあつとも  
後人一らす

任者のあはばそのひらりこいふよはらりしきと人日  
百とち申に 　源重久

きよふけいぬあつととととと也苗代のもも惟まうとん

寛和二年内裏御合の歌冬

友原惟成

うら鳴井それ海り小釣とあてゆきそとそんかまの  
堀河院百とち申に 　大細云仲頼

かろ鳴の山あふる唐の唐よそとつる唐の山あ  
歌一らす 　後鳥羽院御歌

雲あふらつたらんあつとつる山河のふあま歌  
と神あよむとつるも百とち申に歌冬

前大僧正定鎮

心吹のちよまらんものれりりねとせよ丹の河沿

西中者よある 平秋時

いほくは神おきてまゐる小露はくは雲のあや

任者社よよとてなかりけつ百そ方れ中に

者 前大細云るあ

立りり誰そみしん任者社よれとてまのふら

初元百そ方れをまゐる時あつらん

は平定為

物をれあひありそいふすら白波のほよ白きまらるる者

百そ方れをまゐるらん

あつらん

前岡白た大臣

田子御むけのなる時らんらん白波そらんよとけり

御書

ま月野のち雲らんる葉とらんぬるふらまらなるあ

郎らん 前大細云る氏

らんまのまらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん

文保百そ方れをまゐるらん

前大細云る世

甘あて又行むらんせよらんらんらんらんらんらんらんらん

三月書書らんらんらんらんらん

友原信實朝臣

くあひつらりつまらぬよしののけふ  
うひまはる

續後拾遺和歌集卷第三

夏三

建仁元年五十首方あてまつりける

前中納言定家

梅の袖をひらけよらうはてらりふらひの月見  
むしらす 源重之女

こゝろのゆき深てもゆのあそぶさきさきおきか  
一条院位よねうらけり内裏こそ卯月  
のころ八重梅乃咲てゆきをみくころ

紫式部

九重の白くそればいそそ様重ていそそ表しそそお上

玉様とらんこゝろみゆる

道命法師

夫世とて仰ぬ様とて表れ申くゆふのじを以てん

祿子内親王家の言合ふ卯辰

よみ人

卯辰のしりあすいそこのかたやよ誰か

元亨丁卯五月後宇多院二十首を奉る

河原の

夏衣はすもともす玉河のわたすはよらる卯辰

文保百首を奉る

前中納言為相

卯辰の晴らるはやを川志く夕波を岸とらん

久安百首を奉る

皇太后文を奉る

少やふの晴後の袂あはひ弟をふくも成ふけ

順徳院御歌

惟も松の枝のゆい春うらにらる契をみえ

百首を奉る

二条院御歌

時鳥そのこころはうらみもいかりのつらさ

郭云々

二品は親王慈道

悲しみの心こそいさげの時鳥のこころはうらみもいかり

今出河院近來

悲しみの心こそいさげの時鳥のこころはうらみもいかり

郭云々

二品は親王家よ五十

郭云々

は平長壽

まてかそけいぬしをいさげの時鳥のこころはうらみもいかり

郭云々

高陽院方合よ郭云々

友原政経朝臣

あはれまてゆらこころの時鳥をいさげの時鳥のこころはうらみもいかり

郭云々

たふは

あはれまてゆらこころの時鳥をいさげの時鳥のこころはうらみもいかり

郭云々

後二位家澄

あはれまてゆらこころの時鳥をいさげの時鳥のこころはうらみもいかり

郭云々

平忠盛朝臣

あはれまてゆらこころの時鳥をいさげの時鳥のこころはうらみもいかり

郭云々

文保三年百

前泰後雅孝

時鳥まてゆらこころの時鳥をいさげの時鳥のこころはうらみもいかり

野一ノ子

泰後雅有

由そこころのあまのつとめを神女よのつとめ<sup>子</sup>のつとめ

前泰後乃實

郭公初まはねえと問ふすゝいふとあつて  
中務の宗子親王家百々方れ中に

おたふ末緒教定

玉の毛のつとめと限ふつとめみよきつとめ  
和方一取とて松何よ九十咲あまをせける時の

屏風

泰後雅有

一翫しつとめ初まのつとめまふつとめあつてつとめ

野一ノ子

大炊御門右大臣

人傳のつとめつとめ郭公つとめ初めのつとめつとめ  
つとめ郭公つとめつとめつとめつとめつとめ

御家

人傳のつとめつとめつとめつとめつとめつとめ  
つとめつとめつとめつとめつとめつとめつとめ

中務の宗親王

まゝ別あつてつとめつとめつとめつとめつとめつとめ  
文保百々方あつてつとめつとめつとめつとめ

入道前々大臣

乃くまらにさむあはに河をん所くふ初善なりせ  
百さうなり時 右共未替為る定  
つまあひ思ひいそあへ河を終ふ時善く何とれん  
初元百さうなりけり河郭云

贈後之位為子

うは身まそりす初善河を惟ふことたよりめん  
位よなまのしくきる河をれおのことも善  
天河をといふことけりけりけりけりけり

白河院御書

夕日山とておほく河をくふこと初善なり

子五百番方合の奇 前入僧正慈法

くまらにさむあはに河を今わく宿ふ初善なり  
海を河をいふこと 権律師 實性

なまらにさむあはに河をくふこと初善なり

むらさ

達智門院

おのあつ雲井斗れ思ひねらねあつる河郭云  
大綱云性伝

小兼あけてくらふはれ河を初善なりす時云  
元亨三年七月飛山殿よりくまらにさむ  
くまらにさむあはに河をくふこと初善なり



権中納言云雄

わさりとらへむさく人権新の元とくらふはむらじ  
むらじらす 平宣時卿下

一都よりあつともむけい河名まゝいふまに暮る月よ鳴あり  
よむ人しらす

河名ありすともあふ玉運ふしうむらむ書まれ一都  
郭云とよあり 堀河院中又上総

郭云二村むやとえつらんめいそこのこゑるまむ  
一歩内親王堂もこれ河名子乃屏風より

前大納言云毎

河名一都鳴そくそ島の杜乃梢と今そとくならり  
むらじらす 昭慶門院一条

あつら杜の梢れゆら落よあそくあそくあそく  
家よとら合しゆけり河郭云

大京大寺殿捕

郭云鳴そくあつとあつといそくよとゆらならり  
むらじらす 宣旨典侍

あつとく心ありとや志ららんをららりむらじら  
中納言到平家方合り

よむ人しらす

つふまゝのり人何事や何事んは来よゝゝゝの事なぬ  
和方取うそ枯何よ九十咲るあまよせけり  
乃屏風より 坂巻の御院御家

つふまゝしやゝゝゝん何事いやをらゝゝゝゝ  
弘長百々言もてまつりけり何事云

前大納言為氏

天雲のまゝいゝゝ何事はすゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝ 在来元方

立ゝりたゝゝゝゝゝ何事そのゝゝゝゝゝゝ  
郭云子ゝゝゝゝゝゝゝ中納言直房

あまのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
郡ゝゝゝゝ 津守國夏

何事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
元亨ゝゝゝゝ七月飛山殿ゝゝゝゝ  
て七百ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝ 前大納言為氏

あまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
貞治百々言ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
後醍醐院御家

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

又保百々方あてまうりけりとい

権中細云云宗母

三つを首あしぬと橋の神れうとあてねらうすん

魚橋と

平惟貞

あらしの白いとらそ方風よ悪く首そをさうり

兼曆二年内裏後書方合よ五月あし

ゆり

権中神々通俊

はまきくとつあ月あよ日公もあ形れ事の善りして

和方あそ秋の九十笑あまよせらるあ

屏風

大庭つ有家

ふを川あそす流の志いと善やううあ月あのは

百々方あし時 岡白を政大臣

あまらうなるの河入流して心陰々こあ月あは

あえ百々方あし五月雨

百秋門院

あす川あしれせとあまきりあふあ波とそりて

弘長元年百々方あてまうりけりあ

いと

前大綱云あ

あめ川をまらあはあ雲れをくのいれあ月あは

文保百々方あてまうりけりあ

入道前を改る位

おらあふらみふらふら何もなきあつ五月あは  
寶治百さふあてまつりける所漢あ月雨

後二位新家

五月あふらの宗と落そひく若波あは首あふら

あ月あふら

中務の宗并親王

まつ河ふるあはらあはあはあはあはあはあは

後二位家澄

あはあはあはあはあはあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあはあはあはあはあは

前中納言の家

あ月あふらの神松とそふ木あはあはあはあは

あはあはあはあは

祐子内親王家統侍

あはあはあはあはあはあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあはあはあはあはあは

常陸井入を改る位

あはあはあはあはあはあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあはあはあはあはあは

あふ納言忠良

あはあはあはあはあはあはあはあはあはあは

五月のいさよふ邦と云ふはたれいふは  
り  
よも人しらす

今こそ智も思はず阿多誰よわつとと行ひぬ  
むしらす

志あのみすすおあむ野も鳴る急なけり阿多と  
夏あのみそらわあむゆあむ福もられ月乃程とま

宰相典侍

足史のいれあまや妹あらんおと六月乃新そ涼と

邦省親王家五十そそふ夏月

前中納言季雄

約まふ心けしるそのまにわらふ本れり乃程秋の月

元亨四年乙丑五月後宇多院二十そそふ夏月

りつ阿多と云 忠房親王

夏前の玉のわはれ程夜よみそそと月乃程

むしらす 祝部成茂

方の書いさよふ程乃後とにみそそと月乃程

建仁元年五十首方とそとつりけり時

後京極坊政前と政信

精阿多とそとあせらみそとらけりも程あむ

夏乃方ゆに 好忠

リヤシのおまのいさらたみえつるゆさし給の雲あたり  
三条院みよのまもりきつ時帯刀入陣は  
合よ雲 ころし人志す

難波こいさらすつとみえつる雲ま飛ふやろあは  
よ前百さうあてまうりける時

前中納言定家

そつとるや難波かりはまきつる光の雲行のま  
むしらす 内大臣

秋らるはのまけりる雲おむりつとあはるあ  
あえ百さうあてまうりける時雲

後後澄教

輝と光とみきてる雲は雲ふようまはり雲の  
又保百さうあてまうりける時

後二位宣子

ありのまの白雲や秋の雲はひらあ  
むしらす 中宮

とまの何さあの上れ雲あてりあはるあわら雲  
天台座主水光は親王

はらう雲とらうはらう雲とらう雲の雲  
堀河院百さうあてま

前中納言通房

八重津波より下は船よりおちりぬ志あるを志す世  
又保白よりおちりぬ時

津守國冬

今より涼しくぬ蝉のめづる衣に心風そよ  
河色納言とらふとと

後西園寺入道おとせ

夕はまの松吹風の音羽川おちりぬはしにぬき  
元亨より七月飛山殿よりくさくさ  
つとて七百よりおちりぬつらりけり次り

後宇多院御覧

約よそよりおちりぬ海と志の事川よりおちりぬ  
六月後よりおちりぬ

新院御覧

刃を流河よりおちりぬ  
一巻のちよかり

續後拾遺和歌集卷第四

秋弁上

初朝のころいとよきせ給けり

御製

今朝のよきとそら風吹ぬあつらじつきて枝をよ

子五百番方合ふ 皇太后宮女

妹のよきとそら風吹ぬあつらじつきて枝をよ

子五百番方合ふ 大御女

今朝のよきとそら風吹ぬあつらじつきて枝をよ

子五百番方合ふ 大御女

贈後二位皇子

今よりやいそにちん白落も袖よをさかぬ妹をひり

又保百をさかぬ妹をひり

民部卿

今朝のよきとそら風吹ぬあつらじつきて枝をよ

子五百番方合ふ 大御女

子五百番方合ふ 大御女

今朝のよきとそら風吹ぬあつらじつきて枝をよ

子五百番方合ふ 大御女

今朝のよきとそら風吹ぬあつらじつきて枝をよ



二星待契とらふこと

後二條院御教

ふおふは臨あつふ浪河あてまらふれ妹乃々く歩

部らすよしんふか

あまれ川の善清一度星乃杖く毎の波乃はく

浪河旁くらくらくらくいいと星杖をとまあのの善清

源為氏御教

天のりみられ橋乃多らりやくそののとらりとらりいまり

奈王御親

了河杖の契りあらけいとい杖のと海とくらくらくらく

百さ方を一時 中宮御事御契

七りの妹れ一杖の契りをけふ仍のあれ世ありたれ

部らす院御教

七りれいかくの夜あり志とあまたとう杖と契ありん

六条院御教

まさとも恨み海へ七りのまれふとあらわれたらぬ

西安三年七月内裏と七り七さ方をま

部らす前人御教

拂よたらぬす何と七り乃の月長と玉杖をいせん

堀河院百さ方を一時 院御教

祐子内親王家紀傳

セウのあををばふらゆきありんかふむく系あえぬ  
むらさ

源公忠朝臣

拂よのこゆふいふれと天河ありてあえぬ物あり  
皇

香光院入道お黒白の政官

天河琴りらふす形水は海邊ふを後乃すやうん  
平重時朝臣

て川いぬるあふふきこてこよよてい神ありすえ  
又保百をうらふてまうりけり河

前大納言の英教

セウ乃むきあつ神の雄風ようまけいさけらるる  
性助は親王家乃五十五そまうり

後西園寺入道前を政官

くを社を弟いもてあて雄風やまの落そあ  
むらさ

前大僧正實教

雄風いふのころんあふよま井れこの心  
わうあそく六首うらめてまうりけいふ神あり

後京極坊の政官を政官

後系やあまふ雄風落そけあぬまらるる  
あふ風と

前大僧正慈勝

暮らむとてふり秋風のやうに女がさなれ  
又保白とてふりてまうりける時

忠房親王

秋風の吹くはより萩のやうに女がさなれ  
お元白とてふりてまうりける時

昭慶門院一條

弟と本とあて病をたぐひ秋の暮やうにふら  
んこはあまこやせり時内よなせ給けり

暁誠天皇御歌

皆人よふらうなるは君のあまふとておつ

西返

平城天皇御歌

人か人の心はゆふ夜寝ひくをふく白ひける  
正治白とてふりてまうりける時

皇太子御歌

あつるも枕よせんはと麻のつらむは病は出さ  
るはとてまうりける時

後二条院御歌

白露のそくは病は出さるはとてまうりける  
風前草むとてまうりける時  
つらむは病は出さるはとてまうりける時  
我神とてまうりける時

閑院贈たぬる長家の前裁合り

よきしんくら歌

まろくみくまふらふらむる打ふ風なひく鐘

天曆河内前裁合

種徳云

年とく咲ふよりも世帯むくふとさうり世白ひき

郁美門院のお裁合よ世帯歌

世帯云

世帯むくふらむく白ふ世帯の世帯ふすそらに

文保百とらふてふりけり時

前大細云種徳

病ふも麻の糸糸の枯風よらふふくくひて熟ひ

うへられたのくもく三首ふけくもふりけ

河朝孝歌 権中細云実任

色とく咲白やせの露乃玉く庭のおさくはむ

康保三年八月十五夜内裏前裁合

皇太后后実権奉持雅

るもはくむとみまてく白露をさてくひあふま

世帯くらす 為道歌

うへらふあふもむらん夜あふみくのくあふ世帯

三条右大臣

くらら菟の下葉はさよふのこ煙うらねく霧やとん  
心清百そりなりけり時

正三位季隆

実城野の小菟と多そり水やみの下霧はさよふ  
くらら木のこもと之首うけりまわり時  
草花と  
氏部てる者

鳥園の聖への煙萩らぬまにむく霧は清く  
秋ふれ中に  
素還法師

霧ふらさなりの小萩らぬまふとせ人の神あ  
前大臣

前大臣

けり袖と文そりくらさく霧の萩まらぬの秋霧  
よし人ふ知

くららとわくはさよふのこ煙うらねく霧やとん

山階入道大臣家十首

くららとわくはさよふのこ煙うらねく霧やとん

わきとわくの袖と文そり霧の萩らぬまふと

膳西上人

くららとわくはさよふのこ煙うらねく霧やとん

友原冬澄和歌

藤のむらりしけり 雄風の舟はむ言ふ小麻の也

皇太后院別当

あまの藤の下葉はらりしけり 藤を麻の如く

実治百首よりあまのむらりけり 時新麻

新山院内大臣

秋とらへらそとに新葉を麻といはむと云ふは麻の

公卿門右大臣兼右大臣のむらり合り麻

侍従乳母

まゝとて藤の新葉を麻と云ふは麻の如く

むらりす 如新法師

小麻の風の吹くはむ言ふは麻の如く

又保百首よりあまのむらりけり

権中納言云雄

枯るむらりの葉は 外境を新葉に麻を麻と

子首奇しきもせ給けり

後守右衛門尉

藤のむらりしけり 藤の如くは麻の如く

むらりす 修理左大臣殿

夕はけ新葉はむらりしけり 藤の如くは麻の如く

名前はあまのむらりけり

春城雅集

ほの玉は生面なりけり秋風は麻のねたりと松のこゑ

秋分中に 前大僧正良信

煉とく雪そふきおのりけり我宿らき山とあ

元亨三年九月十三日秋分宇多院より

分梅せしれ竹きり時月前麻

表文より又公賢

とむ月の影とくそいそむき木乃下りれ麻やん

控中納言公的

月影よ素約のそ燈とくしつとくそいそむき麻やん

建保二年<sup>三</sup>内大臣家百首よりよる麻

前中納言定家

山をくれば秋の玉のつとむとくそいそむきやん

煉のうたれ中に 平宗宣朝臣

ふおのちあふそそとくそいそむきやんこの秋の音

お入納言為家

いそむねいよは秋のひの音あらしのほとけ

白糸をれ扇合下

後頼朝下

いそむねいよは秋の麻の音とくそいそむきやん

そら

野一らす

正生忠峯

山室に輝けるあけの光をまきまきとせらる麻よそをけり  
建保二年秋よりけり

後二位家隆

あけの光をまきまきとせらる麻よそをけり

野一らす

人麿

あけの光をまきまきとせらる麻よそをけり

中細玄家持

あけの光をまきまきとせらる麻よそをけり

前大細玄為氏

秋菊の光をまきまきとせらる麻よそをけり

為道朝長女

あけの光をまきまきとせらる麻よそをけり

野一らす

二品法親王性助

あけの光をまきまきとせらる麻よそをけり

野一らす

正昭法師

あけの光をまきまきとせらる麻よそをけり

新恒

あけの光をまきまきとせらる麻よそをけり



平貞時御下

夕年の言のつくも昔は人の智人なるは秋の初鳥  
権中納言長吉

松のたまたましゆもいづれ捨るもみえは昔は  
前太政大臣

のたまたましゆもいづれ捨るもみえは昔は  
家五十五なるもいづれ捨るもみえは昔は

入道二品親王の助

と娘のまら秋は月とていづれも音なきは  
守備は親王のまら秋は月とていづれも音なきは

野宮太子の臣

今そと秋の日影の初鳥の月影人のあはれ  
悲ふ知 秩天門院

とて秋の初鳥の月影人のあはれ  
月出の初鳥の月影人のあはれ

雲の初鳥の月影人のあはれ  
文保百の初鳥の月影人のあはれ

法平の臣

秋風は初鳥の月影人のあはれ  
とて秋の初鳥の月影人のあはれ

初秋月

大納言親房

久しき月を始とてけり月ほむ風の音をねと

沖響

久き乃月たりの初秋葉をけりてれい輝をけり

起とす

普光園入道お同白た音

貴林色をけりてとある久き乃月乃輝やとれけりん

元亨三年八月十五未月二十そとす

とれ

二品法親王光朝

くろとある此代のけりふと心月と輝の音をけり

堀河院百そとす

権中納言四信

老後の雲をけりて葉と初とたえまのあつらひの

起とす

奇乳母

まふたてとけりてと初とたえまのあつらひの

月とけりて

續後拾遺和歌集卷第五

秋奇下

元亨三年八月十五夜後宇多院の月又  
十首方多てまつりける時

氏部なる者

久方此雲の月のとみおぼえてくさぬこと思は  
百首方多し時 権中細云云雄

月影のりぬをれます鏡の影とけりて  
河原

山鳥のあらぬのちと秋の月やみとてり

元亨三年八月十五夜月廿十首方めされ

ゆつゝふ 後宇多院河原

御道に雲よみ海に秋の月より人みたり  
百首方多し時 前大細云云毎

いづらふ月ふゆせく我のわくまをりて  
或部なる親王家三首方中し月前

枯風 平秋時

元亨三年八月十五夜月廿十首方めされ  
又保百首方多てまつりける時

友原の房部下

月夜八十鶴ひけてとど月あくれ出づ娘の舟人

船中月とあり 源家長卿下

中良の戸と秋とる月よはそまて秋末ととる

又保百とるうもてふりける所

津守國冬

あやと月とむかひ風あまのそく火の燈は

は月を 入道親王并侍

りふと入心のまゝよとる月とやと秋の浦は

水上月とるうととるうととるうととるう

鳥羽院卿家

月夜の志候がくまの芳晴て月夜海とつた乃溪

月ととて 永福の院

更ゆきまのたむよ雲晴て月影清くらぬ

二条院は首とるうもてふりける所あり

ころんと 刑部の花魚

神苗ゆり三宮とてよ雲晴て音とるうととるう

郎とらす 法眼の舟

嵐吹河とるうととるうのゆつみのしに影そは

後法大寺たふ

るを河のささみふとる月影やあはれぬ舟なるん

本亭の武重家

あつたやうな月と福とくわいふらうらうと

道因法師

あまの川底より出る月をこいやくとるこみかみか

中細の家成家の言合り

友原歌方

天河やをせの流わゆふんこくそすあつたの月

輝のそれ中に 光のそちをたげたる言

よるといふの白波と流りてあまの岩よりやうな

飛山院浄念

そとて月やひらな屋とるんちのらうな秋の白露

又保百そとつりけり時

後西園寺入道おと改言

後芽生かしの白露吹風はあまらて月乃新と新

心月と 津守圓道

うつくしのまよはれは月影は秋風あらて雲と明寺

友原基恒

あまの川をそとる月をいそれてみる桂の下あ

はるの月院よあてまつりける輝の言中に

如新法師

久方の月影をばしあふとの神よゆつゝおやをえ  
前大細云を毎しつをせゆし去日社に午そ  
方中に  
友原盛徳

あゆみの聖に秋風ふつゝ秋小夜子に月と冬  
月の方とをよめり 藤原宗孝

つらとをいそをぬれ音はれんをふとあつ月  
建仁元乙丑十そ方なりけり時

後東極坊の前を改む

さきし独れをまら秋の月志きいぬふと秋のそら  
中務の宗孝親王家方合り

前春後徳徳

光とあつひもさういふと月みるよのつら  
弘安八年八月十五秋夜に院に午そ方  
なりけり時秋に月とをよめり

あ大細云を氏

月影をばしあふとの神よゆつゝおやをえ  
前大細云を毎しつをせゆし去日社に午そ

あゆみの聖に秋風ふつゝ秋小夜子に月と冬  
月の方とをよめり 藤原宗孝

つらとをいそをぬれ音はれんをふとあつ月  
建仁元乙丑十そ方なりけり時

建仁元年八月十五夜和方取撰方合下海山

晴月とつとと 人差つ有家

花とのけ行みあきあつ見よけ柄よあつ月の

又保百とつとをりし時

右若未書み定

雲新とつて輝いあまよと下よととと書くとつと人

叢瑞ま北とつととと

伏見院新書

糸の糸露がすすふ鳴まの根やたそとれよと

むふ知

後之位為理

あきらみのまの糸鳴まの根よ何もう輝のゆき露

建保四年百とつとをりける時

後久我を改て居

輝風は枯り虫のこひ糸つとと露乃枯ひととと

むしらす

後二位家澄

雪とと被とつとつ風ふふんや輝れ糸本なるん

風前橋をいふととと

藤原門院少将

身とつとつて吹輝風の糸をよととととや多るん

初元百とつとをりける時橋を

法平定為

多由のたのしむはむは神風は神つる衣作る見  
形一らす 為道朝臣

風をみよらわさあし昔月のうらすうに多るる  
建長六年龜山殿にて世々う梅廿九日  
よ席あてまつりて河名橋衣とらふと  
よと約りつ 法入道あをぬる  
この里に新まれば風をうたれらるるもゆふ衣も也  
後一条入道前雲白たふはあうて里橋衣と  
よとよあつ 深為康朝臣

あす風神つて新まらふもむたれ又そのまも多る也  
又保百のうらまのりけり時

前大納言俊光

多るわらわは里のいふ是新まに成ぬあされ山を  
形不知 今出河院出来

ふの衣のそくては山回りの座ふりそああう衣ら也  
弘長百のうらまのりけり時梅衣

前大納言為氏

病新あゆま里人のう衣あゆ新まにいふあ  
ふれたのいふもあそふはうまうりし時連



夜榜夜々

深具行部下

里人の神女其の子と白鹿の乳と成すてる家  
久安百の事をりける所

花園たの臣家小大進

く名所の頼朝より倦て由とらむ程も言に  
又保百の事をりける所

又保百の事をりける所

前大納言實教

輝とて新をふとる月影とてとるおとる家

一品内親王常之の御季乃屏風

用白を改る臣

文かう袖も表さしふとる頼朝とてとる月小うと

西園寺入道前を改る臣家とて三千六百首

後約けふ

昔那の澄親前大納言

表又表とゆへりて輝のよれ月小うとる家

平時廣

衣ふとるつととるふとる表とてとる月小うと

前僧正実伴

輝ふとる頼朝の月れとるよとてとる家

後京極持政家方合の野風

後二位家澄

きつれいさるのゆきとつらう 栞とる杜風を吹  
野——らす 前入納言資季子

ゆきとるく吹くと 栞風よとるまはつらうとつらう  
贈後之位為子

月あそふりふもとみえおおらりさの庭は  
お入納言云

あつふゆきとる成ふりあつりのおとみ  
徳徳云

あつひはさるもあつあつあつあつあつあつ  
延長の出さるる菊合

貫之

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
坂上是則

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

人麿

あまのつやの翅のあひの羽れつゝあそりおれ  
むす

初よりいさあそりつゝあそりつゝあそりつゝあそり  
子首よりつゝあそりつゝあそり

後宇多院御歌

あそりつゝあそりつゝあそりつゝあそりつゝあそり  
秋より中より 前僧正道性

あそりつゝあそりつゝあそりつゝあそりつゝあそり  
建仁元年百首よりあそりつゝあそりつゝあそり

西園寺入道前公歌

あそりつゝあそりつゝあそりつゝあそりつゝあそり  
依身院より十首よりあそりつゝあそりつゝあそり

前中納言為相

あそりつゝあそりつゝあそりつゝあそりつゝあそり  
小倉山松林梢の初よりあそりつゝあそりつゝあそり

内大臣

あそりつゝあそりつゝあそりつゝあそりつゝあそり  
あそりつゝあそりつゝあそりつゝあそりつゝあそり

皇太后皇太后

何處ゆく生面乃松れ輝のよととらてそよまをみろるなり

百々方をも時 中文を更所賢

白露も何處とよまよらるるにまて子入のやまを

町一らす

順徳院河

みらする嵐の材みまをせらまらおらる好のまへ

檀中細云云雄

うりし秋乃日較おのよらへたらま峰れみら葉

よみ人一らす

いりし神もみりこころのお露も白くお葉れらるるまを

常盤井入る前を改る信

庭ふもよこらるる我宿の相乃落葉よ秋風を吹

衣笠前田大信

ありし雲田のみらりらなふらまのさそふ輝の月を

冥途百々秋をりけりし時河紅葉

冷泉前を改る信

く御音らるるに輝をまそお葉とわらせし露を

白葉を皇太后皇太后

檀大細云長家

人の月もよこらるる秋をまそお葉れ園とぬよけ

淡路系と云々と 式部卿の親王

お葉と云々と 此の河をよそあなとせし淡路系

言傳ふんと 前入納公の家

あしふ雲はとそいふとも 天は空の輝のり

お入僧正禱助

ふりゆい目敷をけき行むおもひよとてお枝の

弘安百首の方あてまうりけり河

入道の澄博

霧よのりあぬ袖ふさうとて 何子とてお輝言

家五十首よ 惟明親王

のゆる霧とてお神のふよあふと輝る

おののこらん

續後拾遺和歌集卷第六

冬三

冬三

依母院河家

秋風の音聴れ雲のりみらるる時多かりそ冬はさびかり

初冬の心とてあり 前糸後雅有

ふりひるをみえねと云ふ心とて書に冬はさびかり

後一条入道前雲白たる

葉の葉とてや秋風の多みえとてふとてけそいなり

冬不知

お開白たる

冬月のおととて多きとてとてふとてあひとてりつたれ

又保白とてありてまかりける時

芳施利院前雲白たる

とてふのとてありてとてふとて冬は甘く秋はさびかり

時多かりとてふとて 前中納言定之家

仍のなき世ありとてり秋は月ありはとてり時多かり

冬三 糸後雅有

雲の心とてふとて秋のさびかりとてふとて時多かり

右八行

風多かりとてふとて秋のさびかりとてふとて時多かり

権中納言國信

香くもくもくいふおたこの本はうらふ河内とていふ

崇徳院御歌

本枯よお葉らりわらぶめりり何と河内なるあふすん

落葉をよめり 法平澄園

ふりよりふりいさぬお葉らりともいそおまひの私

中納言家成あふす合しゆらる河内後てつ

りけふふいと ちあふ前を政大臣

そくおよびそいふいそおまひるをまはらふあのはじ

侑子内親王家あふす合ふ風前落葉

後人あか

善財の輝よりほのお葉とせさりの神は風をまじら

寛治五年十月八日大か川よ水香河りて落

葉満水とてふとてよませ給けり

白河院御歌

大か川井をたふとゆらお葉くふ立ちら流よあふすの

節しらす 順徳院御歌

たふゆらお葉や輝のよませ川わたす流よあふす

後深草院御歌

あつらふお葉あふすも神を月とやあ葉らる

律師 永観

お茶のよきついでに柿音月堂の嵐をさしおこし  
右の長よ約々の河家よ方合一約きのい  
茶 後には入道前書白の段

枝の屋よあえい善すうにれこそ志くね書里河家  
百々方の中に 式子内親王

冬よそいこふぬ枝のやよ本業河家あゆむ  
元亨二年の八月大覚寺殿よ約きありて  
ふくむとさうりて方けこまうりこいふ  
落葉よませ約り 後宇よ代河家

心室いらつお茶にたゆえそ冬らんあこゆり

子丑百書方合舞 正秋門院丹後

心室の書よりらきた約あえそ本業あふ分らん  
冬はこの中に 後之位河家

奥のの本業乃よふゆり約のこえそやふこい  
お元百々方よそまうりけり河家

贈後之位河子

心室あえあそら約の約格よまゆりしりこ  
百々方よそ一河 二品は親王寛助

ふらひ輝の本業よゆそ約よのね松の事  
部一子 道徳法師



そのつゝ妹もさきと成るときり親の下なる意留  
延長十七の十月山前入菊葉乃日

源忠朝信

神云月何ふよらう菊の心秋とてふささみえはと  
を菊風と云と

平維貞

霜のよの香ふと冬ふとけり妹もさき親の上を  
おと

平定武維純

みかしの他老た  
けつたたの貞宣  
けつらと

多岐のこみ下露やいりる人難のや枝よ結ふゆさ  
平貞宣

わさよの消ぬとめは枝の露ささきとめと親とあは

原を系とらふととめ

藤原基任

冬ふとけり糸葉とてい雪のやふれ糸と親とあは  
邦有親王家の五十その中いさ草

権律師實性

枯れつ冬雪れおら風とてり人親とらふ袖とてり  
む

藤原秀長

ゆえ海つ香とわら山風とてり人親とらふ袖とてり  
後九条前同大長

純のこみや吹とれなのわさら糸あひく親親とらふほと

平貞時朝片

なふくく入江の波は風吹きておれをきりきりおれ

二条院續波

難波の江のわが波もそなたをきりきりおれ

依見院沖波

おれをきり難波の波もそなたをきりおれ

土御門院沖波

なふくくおれをきりおれをきりおれ

おれをきりおれをきりおれをきりおれ

前二条院沖波

なふくくおれをきりおれをきりおれ

おれをきりおれをきりおれをきりおれ

難波の江のわが波もそなたをきりおれ

おれをきりおれをきりおれをきりおれ

なふくくおれをきりおれをきりおれ

おれをきりおれをきりおれをきりおれ

二条院沖波

なふくくおれをきりおれをきりおれ

おれをきりおれをきりおれをきりおれ

なふくくおれをきりおれをきりおれ

性助は親王家の五十首奇

前大細云為氏

冬に新に親と云ふてかかるといふはもろ橋よこり月影  
影一らす

後二條院御歌

天の川月よもゆぬ影あり雲はみかとうまのわかれ  
豊明節會とよませ給ひ

御歌

天降風神さしし女子の御書はれゆこゝろそ  
かえ百そつちなりけりけりけり

六條内大臣

明石こゝ海の子をならせりけりゆ海とひて鳴らん

歌ふ知

平政村御下

風をみり波をみりけり破ふしとて子も捕つて是

人丸

あまの海は波子もなりけりかこも志のふ首がわめ  
建長あまの波は磯にたよこそつち梅をば  
時をみり子もと

六條内大臣

志をみりけりけりわめを志のふ首がわめ  
は性も入る前雲白を政大臣内大臣よゆる  
のち合よ子も

源朝臣

秋と成ふ波うつ秋の浪子を記しはとあす鴨もさうり

深衣子鳥とていづれもせ給けり

高倉院御歌

浪のそよぶるささまぬるふ友をしのびしはよき

冬れ方の中に 宰相典侍

難波の浦にりまらぬ友をうらむ中れねとむん

山階入道たふはあやそ河子をよとよと

津守御歌

秋と成ふみまをたふらぬる友をのたふし河よ子を記

むらす 昭慶門院一條

ゆえにまらる榊乃河系は月よふと浪のそよを記す

院御歌

友子を月よとあやむ記しはさなぬる浪れらの抱よ

子五百番方合よ 赤陽門院越あ

土の月れてあやの足をと舟のうらふらん子をあや

むらす 俊恵法師

子鳥のあやの足をと風さそそ浪るふ砂の土の月

大貳二位

らあにまらる池のわがわが鳥のそよせりふ

赤山殿とて人むらとさうりて七百さう

けつしつりけつしつ池水鳥

氏部て為る

池のふつふつと音のゆるゆると音のゆるゆると音のゆるゆると

部しらす 楽道法師

人の川舟をたのむやとあつらんやとあつらんやとあつらんやとあつらんや

建保の内裏五つ方合よ冬月風

後二位家澄

高川木のたれたれとあつらんやとあつらんやとあつらんやとあつらんや

少なゝあつらんや なる重徳

たつた川さの風とあつらんやとあつらんやとあつらんやとあつらんや

源邦長下

奥の岩のたれたれとあつらんやとあつらんやとあつらんやとあつらんや

惠慶法師

あつらんやとあつらんやとあつらんやとあつらんやとあつらんや

漆色少とあつらんや

法橋師昭

あつらんやとあつらんやとあつらんやとあつらんやとあつらんや

又保百とあつらんやとあつらんやとあつらんやとあつらんや

後花園院内大臣

心風とあつらんやとあつらんやとあつらんやとあつらんやとあつらんや

前権僧正雲雅

風をみわすむのやまを冬に吹かす玉のりり  
冬より中に 徳倉右大臣

雲ふくまひの嵐はえして伊勢のゆきを吹かす  
大正宗秀

山の秋のねえれ花はもえて嵐とついでに吹かす  
お中納言定家

ふかふかぬく玉のをほえて雲をさるる雪のゆき  
野経実と 有原為冬

分はる雪のをゆかすしと神よなまのゆきを  
お

題一らす 後鳥羽院御歌

見たりすはるる雪のふ風はえしてとくらねはまの雲  
前入納言為家 十廿三奇

信實朝臣

神をゆかすせれ枝の冬枯よふ雲入の雲ふりけり  
光の雲もち入道前権政大臣家言合

善山名 源有長卿下

夕は雲をよそせれの昔の上はまの雲のふりけり  
弘長百三十九年あそよりけり時書

多雲お月大臣

志くはれおふらふみ一雪乃軍中てつりつ時をひかり

一内親王意をされ宮中子の屏風より

右衛門督長宗為定

是にのりおぬの晴をたてたあひく雲のふりて白雲

前入納公為世

とふよ風ふつてなはらば松と枝おまきれ忘る雪

雲路百をふめされけりつらふく小枝雪

後醍醐院御製

筆におつ松の梢とふりて山よりたかくつら白雲

和方可うそ秋何よ九十嘆ふまよせけりつ時の

屏風より

後鳥羽院御製

任者乃松よ白雲ふつては都よりつらけい具を忘るを

後宇多院よそそまろりけり冬は方の中

よ  
惟宗光吉

吹きわらびく山風よとれた本は陰も枝とよまろ白雲

庚申乃御神系長のつらふ女房方合

ゆけりふ  
祿子内親王家宣旨

雲ふつてみかきく心おぬよまろいつまどうれくことえん

題不知  
津守國夏

ふの心おぬよまろいつまどうれくことえん

用書と

大の貞重

引り教の妹は日敷つてついでに書れとて川乃実  
弘長三年内裏より百三ヶ方なりける時

雪朝

前大納言為氏

物まきまき入りのとれといふとて程行かぬの如書  
又保百三ヶ方なりける時

権中納言云宗母

とておとといふよりせんといふに記しとてゆかた思ふ書

庭書と

大の廣房

栢の屋より何れ書め絶しとて庭を離しつりて書

権少僧都能信

書つり難いといふはこれとてやんふるもと由ん

龜山殿七百三ヶ方遠炭竈

前中納言能継

とてやんふのといふはまよふれつてつひに書きた

庭書と

中納言家持

わく玉は心細りて書くといふは書乃我宿ふなり

中納言能輔

物り身方といふはつと玉丸年つりゆ我を解り

庭書と

前大納言為家



はるゆき月花らくのすそくくさ月日

くさくわわ

續後拾遺和歌集卷第七

物名

冠のこ

曾祢好忠

あまをきこひのこひのまはるふとひのこもあひま

中納言兼輔

夕花の香をみよとまの目なく言わらむとられ

はらけれさくやよひらるとけいそ

兼式部

はるゆきいづるふりしほとらんらりふりしほあな

久安百三ふりあてよりきりあつてふりあ

皇太后后文太事後成

花の香あらずもいづこもあやめなるの宿よいそひ

やうん

後杉朝下

と海の浦やなほさしよあそびそそむ松まつえ海之音

しりし

前大細云為氏

あらふあひあまのうも我しはりしとそ世を恒然

亭子院乃方合ふ子れむのま

紀友則

いざいすらすたぬのふらりしとわびのささるのま

しり

正三位朝臣

よかこころのこころあはれぬよしけしとあはれむ

なせしめぬ

後頼朝臣

物ねのこころあはれぬよしけしとあはれむ

久安回心つとめしりしとあはれむ

崇徳院御歌

しりしとあはれぬよしけしとあはれむ

なせしめぬ

前中細云臣房

月系れらあはれぬよしけしとあはれむ

子そあはれぬよしけしとあはれむ

後宇治院御歌

仲つせりるあやと治よおまの神志がらとていふて

いふていふていふていふていふて

有原相如

いふていふていふていふていふていふて  
正治二年一百一十のりけりていふていふて

皇太后宮太后

いふていふていふていふていふていふて

いふていふて

津守國助

いふていふていふていふていふていふて

いふていふて

入道前太政大臣

いふていふていふていふていふていふて

いふていふていふていふていふて

いふていふていふていふていふていふて

いふていふて

後西園寺入道前太政大臣

いふていふていふていふていふていふて

いふていふて

いふていふていふていふていふていふて

いふていふて

有原澄信卿下

いふていふていふていふていふていふて

いふていふて

二条太皇太后

君の御心をなぐさむるに似せしむるは

と云ふ

新たて居

松のよき木はしとてやうに思ふに我君の代のおもひ

くは

光院の御前白を政大臣

梅の枝は物ごとくお山木なりとてぬま入りや

源氏の巻くはれみとてよみ侍をうけし中に

クウガ

権中納言云雄

祚のまはりのまのゆかりは吉野のまはりのまの

たかきもれの中はくはと大

よみくしらす

うきとてはあめいあつと日とりの言ひを女は

いし

園白を政大臣

我君のまはりのまのゆかりは吉野のまはりのまの

くはとてはあめいあつと日とりの言ひを女は

よみ侍をうけし中に

和泉式部

我君のまはりのまのゆかりは吉野のまはりのまの

よみ侍をうけし中に

續後拾遺和歌集卷之第八

離別奇

とよき國よ海よりきりくよあかしのくに  
るすそと

別路のまにまに主運のこれ我と人よすまら  
りす

ひひかたれたあぬはかりこころわらふとあふ  
今出河院近來

らふとよきとよよなるあはれ物といそまらるる母  
別とよあ  
信實綱代

ゆいづるこ海とよきふらふあふあふのあは  
よみ人志す

白あれ神の別へ行なれとあひまをてゆらう  
出河院白くまよあひらと

と夜神別あひまあひまきんとそと  
あつまらるるきりくよはつとさしつらう  
は平定為

後多ふあらしむる東海といのらふとよきとあ  
けしとあふよ 弁乳母

行々ぬ命ふもたなり友よいゆりさのまきれ松原  
安長つ院甲斐ととこあまうゆしやとせ  
ありきるむに 前大納言為氏

うやこられとがゆらうむじいさおれをゆり  
あまゆりきり時人のか行みくらひあり  
よもいへらす

あせとひかりてもあはまの勢のかれとわ  
源道深筑前とよとらゆり

能因法師

あつこらめかたゆらうとそ人よあふり

郎 八條院六条 三舎

けりこひとこしほきりやわつとらゆり  
大納言師氏

かたふそとらゆりかみらのれいとそあふり  
ととゆりきり人よとあつらうす

友原元真

神の上ふら白落そとらけつわらぬる系ゆり  
かた 前系後雅有

梅衣露とまゆらぬいとをくらと神と心とせよ  
津守國助

都人とゆるはれはるるの梅とたりいさくせん  
たやのいさくせんりけりあやをりけり

友原相如

此風よきとほいなるあつたはるる心算のあま  
都 一 らす 人丸

物かくみとあふん系花あひゆくあつたはるる  
久世百くちうとてよりけり時離別

白雲の居る事又後成

嘯とさうて此か初はとやとてすははり  
あふのくちうは 饑ととてよりある

貫之

あつたはるるはさげの月見つるを推してあつたはるる  
源順能登ちとてよりあつたはるる時中より

けり 中務

いそそとゆつたはるるさうとていそそとていそそとて  
こうまうらよ 康濱王母

あつたはるるはさげの月見つるを推してあつたはるる  
伊予國よあつたはるる守りけりあつたはるる

つらうけり 能因法師

いそそとゆつたはるるさうとていそそとていそそとて

初めよりとてある 常盤井入道前を改む  
お坂乃ゆづきをむしと名あてつをむし人の志くお初よ  
平宗宣釣たあつまのゆりくさりきり討や  
つらつ約けり 権中納言云雄  
初め又お坂の雲れ戸をいひともいひいたのこおはし  
返一 平宗宣釣下

用の戸とらぬ時代より立入り又お坂乃ゆづきを  
あつまのゆづきをむしりけりふ逢坂乃雲とゆと  
てよある 氏部之成花

こえゆきいふゆりきりからくとあまお坂乃雲といひえ

むふか

前入納言云為家

立入りとてとあまお坂乃ゆづきをむしりゆづきを改むゆ  
あつまのゆづきをむしり馬つらつすとしてよみゆ  
けり 西園寺入道おた改む  
たのゆづきをむしりゆづきをむしりゆづきを改む  
ゆづきを改むゆづきを改むゆづきを改む



續後拾遺和歌集卷第九

羈旅奇

龜山院位よねまじりくきつ時うへ乃枝のこた  
むとさうりて方つりまうりけふおれ人  
踏とふとを 前大納言為長

り人の姓来といそきたりふもたあつ成代に程そ  
子そまうしをせ給けりつ時

後宇多院御歌

心そ初よとめてあまらるむおれけし聖に初をり  
むしーらす 式子内親王

初そ雲まりのふりえ出弟ひき結ふらよ乃中山  
夜思暈佳妻とらふとを

皇太后文太皇太后

弟枕旅木の程といふおれん宿ふみなほに旅友おれ  
むしーらす 惟明親王

草枕結ひ初つりうらりといひそや道新末のほ  
初元百そまうしをせ給けりつ時

前大納言俊定

ありまふらえとまは旅衣袖よ露らるおれのら  
むしーらす 平齊時

ふゆきに露の如く接をくもも輝くや雪らけあり

前入納言實教

接衣とては尾衣打あひと袖とひとふ杜風そや

院河製

却て波のうへは接衣野山の露と又とさねん

正治二の百そふなるしける河野接

あ久瀬之患良

氣志をささるやう衣のりは我ともあす秋に

むしらす

坂高羽院河製

はゆきけりや雪鶴うけの接衣は浪さぬと袖をぬ

弘長百そふなるまわりける河接

後二位行家

茅枕あまも接ねとてまきと秋のをくたりふきる

たふし心と

右兵衛督基氏

鶴あ〜とみよしの茅枕しく秋らけの枝つらん

道徳法師

らそめれ茅の枕より秋ねとるてととひるん

接泊愛とふるん

尊孫法親王

ふゆはと河の破の松よは接衣の着そみき

前大納言為世

舟に漕の波はうらさきうらさきとやさうらさき  
形一々す 惠助は親王

も浪風はゆきせぬ舟のうらさきとやさうらさき  
衣笠お肉太臣

わら茶を沸かして舟にゆきぬるあつたぬき  
都よりあつたゆりゆりては前大僧正  
徳のりくふよきとけりりけりり中

お右近大納言

うら波君よのそとよき浪の橋りりききき

お元百三つあてまつりける時後

津守國冬

ゆきと整りなほに宿とぬきあふぬきまけん  
久安百三つあてまつりける時後

侍賢門院堀河

うらさきとこれと後ねとさあつたさうらさき  
形一々す 平氏材

うらさきとこれと後ねとさあつたさうらさき  
うらさきとこれと後ねとさあつたさうらさき  
うらさきとこれと後ねとさあつたさうらさき

うらさきとこれと後ねとさあつたさうらさき

う雲法師

弟枕ありき露よとてあはれ月や孫枝の影と見え  
垣石の柱れ方合とてくこよも竹のり時接  
泊時ぬと  
土御門内大臣

河内とるきいりあひねえて弟の枕よありて  
都らす  
右大臣重貞

孫ねとるる新の中心あきとていゆていふる藤の横  
藤原保徳

横雲のゆふひくことあふとてこほ道のりよあふ  
赤元百三郎孫 可秋の院

白雲の孫枝のありとてあふとてこほりや申  
都ふ知  
世良親王

紅糸の赤まほふおとてあふとてあふまほふ雲  
孫枝と  
た大臣

川末の里とてあふね孫枝立たりてや宿とては  
正治百三郎あふとてあふりける時親孫

小侍後  
こほりや宿りあふね孫枝のまほふとてあふ  
あふとてあふ

津守四平  
あふとてあふのまほふとてあふとてあふとてあふ

設問の院に補とてめ約きる百その中

前中納言定家

後ねとら著録あるえねと後れ其うふ子の嘸れ志

野一らす

お大僧正道玄

嘸の概ふくしそ概介の概ふくしそ概介の概ふくしそ

和方取ふくしそ概介の概ふくしそ概介の概ふくしそ

奇

鴨長明

そひ概介の嘸の概ふくしそ概介の概ふくしそ

あまねく入ゆるしそ概介の概ふくしそ概介の概ふくしそ

嵐のそらむくゆるれし

源親長下

お坂の雲霧れ風はじふとこえそとそとそとそとそと

後京極持政家十そとそとそとそとそとそとそと

は橋形昭

牙とえぬふいそとそとそとそとそとそとそと

むふ知

権律師雲祥

いしらい急そとそとそとそとそとそとそとそと

堀河院百そとそとそと

祐子内親王家紀評

こえぬふくしそとそとそとそとそとそとそと

普光園入道前室白家セキとて古々七十年セキより

竹ける何様 深蕙氏朝長

浪おどろくふ白門の開こそそゆきゆるく敷く

後宿と 友原基任

都ふ後村の着れ開守とひくとの嵐あつたり

津守雅國

若ふのふまとひにとは秘わる秘の秘多く風を

都一らす 前入納公を為家

後多つまふ風のらむとは秘ふ宿とうはげし

いふのさ原

續後拾遺和歌集卷第十

笑奇

堀河院位よれまうしくきりけり人のた  
祝のふとほりけりふとほりけり

俊賴朝臣

子とせとせと世にまほしきとせとせとせとせと

祿子内親王家のちか合よあつらん

よし人不知

君の代よあまのし世にけりよしけりよきり

祐子内親王家のちか合よ子年とくよあつらん

まほしきより若ねよあまのちとせとせとせとせと

節らんす

僧正遍昭

のちか合よちか合よちか合よちか合よちか合よ

子首よりよませ給けり

後宇多院御歌

はなれ木のやつとくはあまの世よあまのちか合よ

又保百のちか合よちか合よちか合よ

は平定為

はらのふ今とくちか合よちか合よちか合よ

弘安八の二月後一位貞子九十賀あまのちか合よ

河上みゆり

八歳之澄博

此は世十とせ乃去九多いつの事と抄子成勢也

曰十年二月内裏とて常知力春とてと

梅せられ約けふ 承光院入道前実白の政官

君の為言の戸出の言といくころの代の人とてはくえ

卯枝と約約けり 法成も入たあ務政を政官

祚代り年れ初よふら枝といひそあきつ去れ人

白河院とて子白一約けり日

宇治入道前実白の政官

此もやと人ひそくやん(二葉)り初末をさる松の梢

永保四年内裏とて子白と

系極入道前実白の政官

百歳より自れ松と約けりく君の中とせそくそと

曰くといふあり 中納言綱忠

子白すむむあつね先我宿の松と子とせ松葉を後

建治四年の飛山院よ去松葉子年とてと

梅せられ約けり時 前入納言為氏

去よりあつ中とせとさお人君と梅め乃去松と

武部つゝの親王家とて梅葉久芳とてと

とてとあり 平貞河部下



きふりれ子とせぬまよとてう代ふまて自念宿のびらえ  
後二条院位よ極まりしきう時梅光盛之と云  
とて梅せぬるに 前開白たふは

ふらそ目殺うさけり梅光のひかりそ風ふらりき  
天曆山時氣象方 徳徳云

君う代より傳へる梅光のまきさうけふたのまらうか  
部一らす 後之位範宗

光とみら内山のりる木がふらうとせりあへ  
正徳二年二月鳥羽殿よ御親行きれり  
光流まふとらふとて梅とれけりふ

一条内大臣

新のきとまの光とあひやうのみめさぬしりるん  
寛治八年八月十五秋を移居を敷池上月  
とらうらんと 大納言云云

よそりふらぬ池のあまのころあそとてむ梅村月け  
建保六年八月申殿を池月之的とて  
梅せぬる時あり 正三位知家

池水乃世とらよゆきとて新末とて月とてむ  
建仁元年八月十五秋和方前撰とて合月  
夕秋友 後京極坊政前大臣

月多しと雅ふふ人君の代は輝のこゝろひれりぬ

文治のの御入内屏風より

前中納言定家

君の代とやらよとつらふよ子孫の御事と急ぎの也  
宇治入道前実白家方合は池ありと

権中納言定頼

年々とてとむつと君の首の池のありありと  
長保五のには女寺入道お持政と政と臣の  
方合は水名と松とありと

右の御言

君の代のありありと松陰の子といやの御言と

西子内親王ありと繪ありと一竹ありと

雛及紙のありありと相換

君の代をとりて病ありとありと御言と

仁和寺の人葦舎徳紀方伴勢圓風信

大伴忠実

伴勢のありありと清とと病ありとせの御言と

昔和元の人葦舎主基方とありと

ひとやま 深草澄

君の代はありとこの御言とやとありとありと

文保二年大嘗会徳紀方辰日の樂破遊の  
國益原御 前大納言俊光

多々世々々々々々々々々々々々々々々々々々

まふりりりり

